

ふるつはちまんやまいせきはくつちようさげんちせつめいかい

令和4年度 古津八幡山遺跡発掘調査現地説明会資料

① 古津八幡山遺跡の概要

標高約50mの丘陵上にある弥生時代後期（約2000年前）の大規模な高地性環濠集落で、古墳時代中期（約1600年前）には県内最大の古津八幡山古墳が築かれます。弥生時代から古墳時代にかけての変遷や、北陸や東北との地域間関係など、当時の日本列島の社会情勢を考える上で重要な遺跡であることから、平成17（2005）年に国の史跡に指定されました。

弥生時代の環濠に囲まれる範囲は、標高約50mの丘陵頂上部の南北400m、東西150mほどの範囲です。これまでの発掘調査で竪穴建物64棟、方形周溝墓4基、前方後方形周溝墓1基などが確認されています。環濠は幅・深さとも約2mで、V字形の形状です。この時期、中国の歴史書の中に「倭国乱」の記述があることなどから戦いに備えたムラと考えられています。

古墳時代になると丘陵上の集落は廃絶しますが、直径60mと県内最大の円墳で、越後平野の広い範囲を治めた豪族の墓と推測される古津八幡山古墳がつくられます。



古津八幡山遺跡全景（北東から）

② 古津八幡山遺跡の整備概要

平成16（2004）年より整備事業を始め、主要なエリアの整備が終わった平成27（2015）年から古津八幡山遺跡歴史の広場として供用を開始しています。

これまでに竪穴住居7棟や環濠、方形周溝墓2基、前方後方形周溝墓1基、古津八幡山古墳などが復元整備されたほか、麓にはガイダンス施設である弥生の丘展示館も整備されています。なお、令和3（2021）年1月の大雪・強風で倒壊した4棟の竪穴住居について、現在、災害復旧工事を行っています。

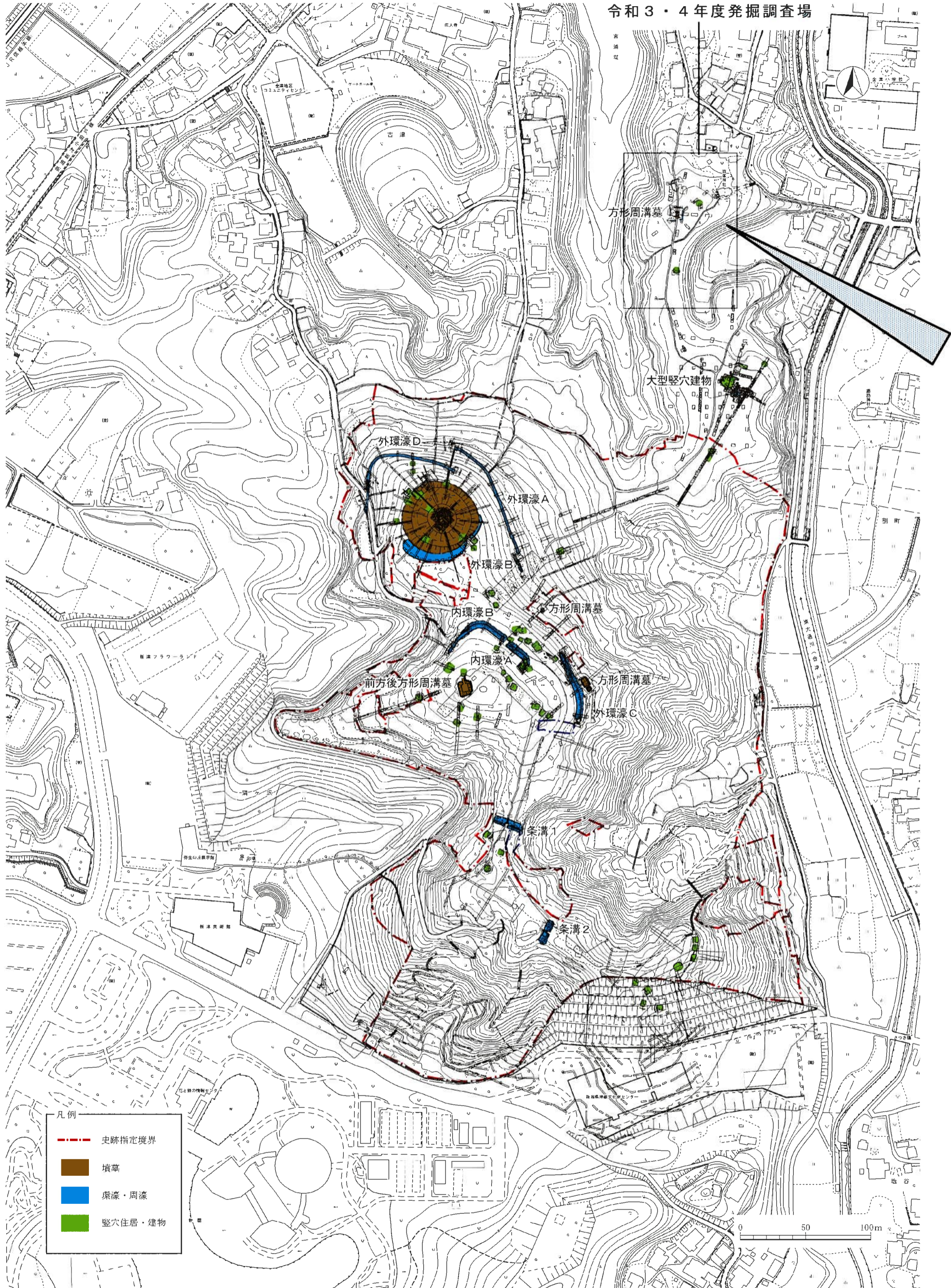
③ 今年度のおもな発掘調査成果

史跡をより適切に保存・活用していくため、史跡外における遺跡の状況把握を目的として、平成29（2017）年から標高約25mの遺跡北東域の史跡指定地外において発掘調査を実施しています。昨年の調査では、弥生時代の方形周溝墓が新たに発見され、内部で3基の埋葬施設が確認されました。今年度は、方形周溝墓や埋葬施設の大きさや構造の確定と、周辺の状況把握を目的とした調査を行っています。

方形周溝墓の大きさ 昨年の調査で不明瞭であった方形周溝墓の東辺の周溝が確認されました。これにより、周溝の内側で、長軸（南北）9.6m、短軸（東西）8.4mの大きさであることが確定しました。なお、東辺の周溝から弥生時代後期の壺が出土しました。

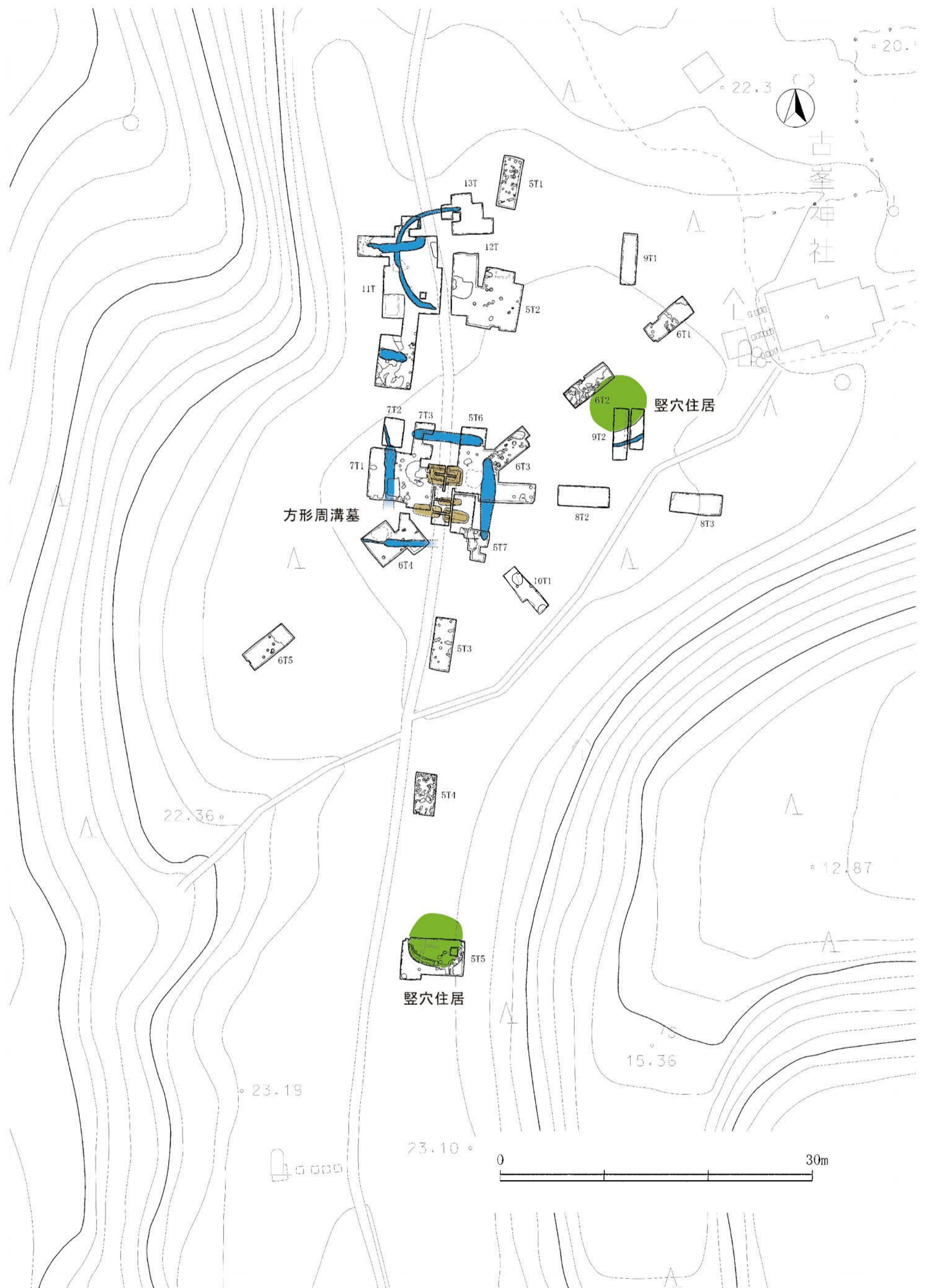
方形周溝墓の埋葬施設 方形周溝墓の内部において、昨年の調査で3基の埋葬施設が確認されていましたが、今年の調査でさらにもう1基の埋葬施設（埋葬部4）が見つかり、合計4基の埋葬施設があったことがわかりました。

各埋葬施設の大きさも明らかになりました。埋葬部1が幅1.6m・長さ3.5m、埋葬部2が幅1.2m・長さ2.5m、埋葬部3が幅0.7m・長さ2m、埋葬部4が幅1.1m・長さ2.8mです。



- 凡例
- 史跡指定境界
 - 墳墓
 - 環濠・周濠
 - 竪穴住居・建物

古津八幡山遺跡全体図



令和3・4年度発掘調査場所の平面図

また、いずれの埋葬施設も穴の中に木の棺を入れていたと判断されますが、埋葬部1では棺の周りをさらに板材で囲う木槨構造であったと考えられます。以上、埋葬施設の大きさや構造などから、埋葬部1に最も有力な人物が埋葬されていたと推測されます。

なお、埋葬施設の底面高をみると、埋葬部1に比べて埋葬部2～4が約20cm低く、埋葬部1と埋葬部2～4とは構築過程が異なる可能性が示唆されます。

方形周溝墓周辺の状況

方形周溝墓の北東側で弥生時代の竪穴住居が1棟見つかったほか、北側でも周溝をもつ建物跡が1棟確認されました。どちらの建物も円形状の平面形態になると推定されます。

また、北側の建物跡の周溝を壊して直角に曲がる溝も確認されました。この溝については、建物の区画溝あるいは周溝墓の周溝の可能性が推測されます。ほかにも建物の柱穴と考えられるピットなどが確認されています。

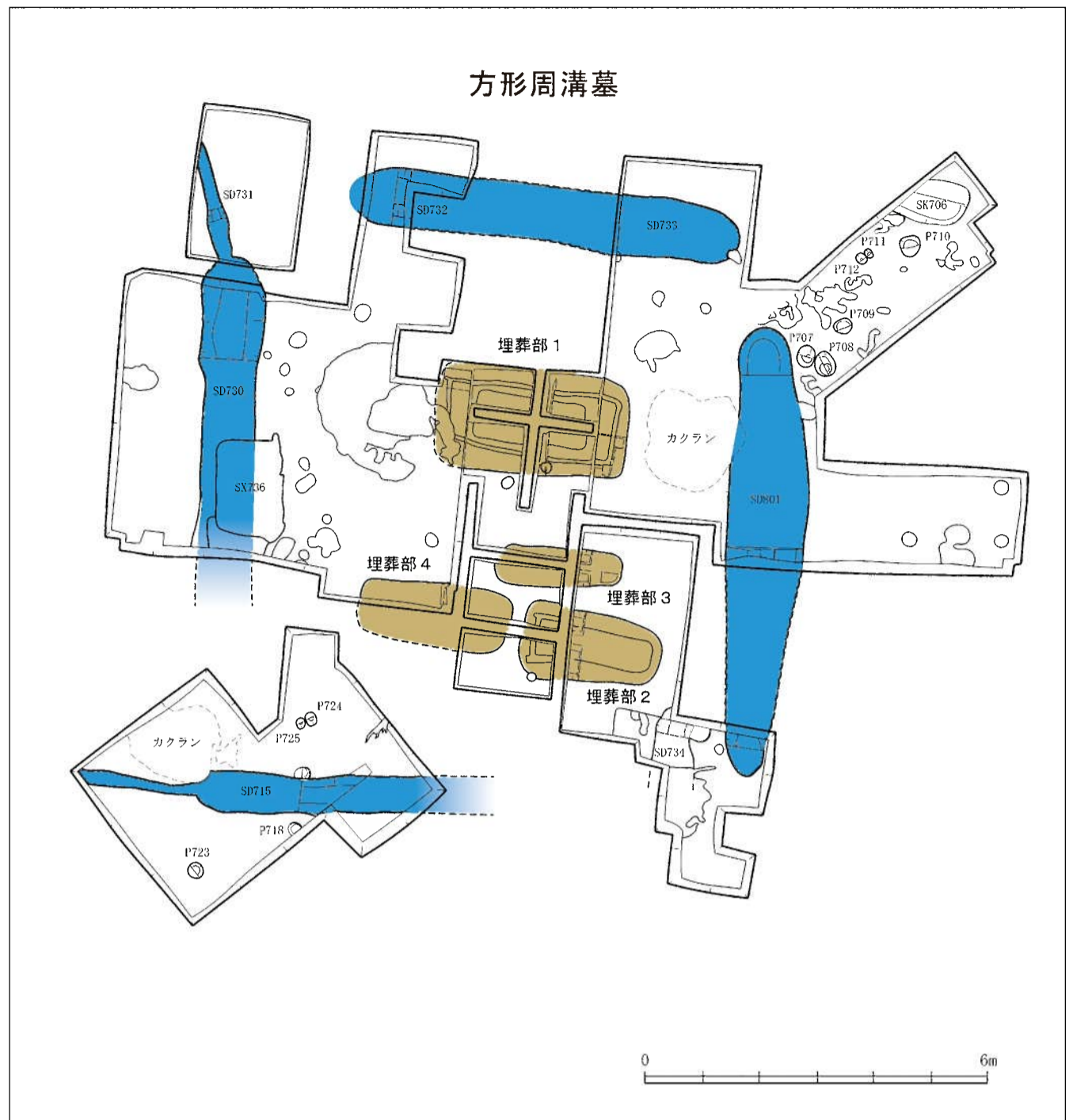
④おわりに

今年の調査で、方形周溝墓や各埋葬施設の大きさや構造などが明らかになりました。また、周辺の状況も次第に分かりつつあります。

昨年見つかった方形周溝墓の周辺は、少なくともお墓が密集するような状況にはなく、方形周溝墓が特別なお墓としてつくられたことが推測されます。また、複数の埋葬施設をもつことや木槨構造の埋葬施設は、弥生時代のお墓としては県内初、東日本の中でも希少な事例であり、その分布状況からは西日本の影響が強いお墓であるといえます。

これまでの調査で、丘陵中腹域において古津八幡山遺跡では最大となる大型の方形周溝墓や大型の竪穴建物などが確認され、いずれも西日本の影響が認められることなどから、この場所が丘陵頂上部とは様相が異なる空間として認識、利用されていた実態が明らかになってきました。場合によっては、丘陵頂上部の集落とは異なる出自をもつ集団がこの空間を利用していた可能性もあります。

いずれにせよ、丘陵中腹域の調査によって、古津八幡山遺跡や当時の社会を考えるうえで重要な情報が得られました。今年で発掘調査は一旦終了となりますが、平成29(2017)年から実施してきた調査によって古津八幡山遺跡の新たな価値が発見されたといえるでしょう。最後に調査にあたりご同意、ご支援頂いた地権者をはじめ、関係者の皆さまにお礼申し上げます。



方形周溝墓平面図